

四月二十日～五月二十八日、克作戦第一期中「ラウサウク」「ワロー」付近戦闘において将校一人、下士官兵二人戦死、下士官兵一〇人戦傷死、負傷二六人。

五月二十九日～八月十四日、克作戦第二期中「カロー」「シキップ」「ピンラウン」「インデー」付近の戦闘において下士官兵、二四人戦死、下士官兵一四人戦傷死、負傷二一人。

まさに「ビルマは地獄」であった。

## 戦争末期のビルマ

長崎県 種村 数一

私の家は普通の農家で家庭は父・母・私と妹が三人の六人家族でした。私は次男ですが、私が入隊する昭和十八（一九四三）年の春に長男が病死しました。

昭和十八年二月に私は、いつかは兵隊に取られるに違いない。それなら少しでも早く軍隊に入った方が良

いと思って現役志願をしました。幸い兵隊検査も皆さんと一緒に受けられて甲種合格となりました。

父母も長男を亡くした上に私まで居なくなるのは非常に心配だっと思いますが、時局柄口に出せずにいたのだと思います。

昭和十八年十二月一日、現役兵として長崎県大村の西部第四十七部隊（歩兵第一四六連隊補充隊）の西田隊（歩兵砲中隊）に菊部隊（第十八師団）要員として入隊しました。

早速、一期検閲のための猛訓練が始まり行先は激戦が予想されるビルマ戦線ですから直ちに役に立てる兵隊にならねばと自ら奮い立てて猛訓練に堪えました。

菊部隊は現役兵中心の部隊であります。それに引き替え竜部隊は召集兵が主体の部隊でありました。

私が入隊した西部第四十七部隊は竜（第五十六師団）部隊でありました。竜師団は、その頃、中国雲南省南端の山岳地帯で米式装備の中国軍十六個師団七万人と対していました。一五対一の戦争といわれまし

た。

猛訓練を終えた私達初年兵は門司に向かい、乗船するために待機していましたが、輸送船が一向に入ってきません。宿舎も後から到着する部隊に明け渡す事になり、命あるまで自宅待機という非常事態になり軍装のまま帰りました。

家族は突然の帰宅に、びっくりして喜びましたが、再び出征するので複雑な気持ちでした。間もなく輸送船が入るから帰隊すべしとの連絡があり、再び改めて別れを告げ家を出ました。結局三カ月の自宅待機となりました。

五月二十六日、入隊後半年たつて漸く門司港を出航しました。輸送船は「有馬山丸」七〇〇〇トンの大きな船でした。

航空母艦や駆逐艦などに護衛されてシンガポールに向けて航行を続け、台湾を過ぎてバシー海峡にかつたある日の朝方ドーンと衝撃があり、船底にいた私は「やられた」と思いました。

戦場で死ぬのは本望だが途中で水死とは残念と観念

しましたが、幸い船首がやられただけで沈没の恐れなしと知らされ一安心しましたが、前途は多難なりと痛感しました。船の防水区画の一つがやられたただけなので浸水沈没を免れ、自力航走可能と判定され、台湾高雄港へ逆航の上修理することになり反転、無事高雄港に戻りました。

被雷当時、甲板にいた者五、六人は慌てて海に飛び込んだのですが、幸い護衛していた海軍さんに救われたそうです。

「有馬山丸」が高雄で修理中、私達は近くの小学校で一週間待機し、修理完了の船に再び乗船し、フィリピンのマニラ港で五〇〇〇トン級の船（船名不詳）に乗り換え、島から島へと敵潜水艦を避けながら、やっとシンガポール港（当時は「昭南島」と呼んでいました）に上陸やれやれと思いましたが、戦場に近づいた緊張感を強く感じました。

時、正に昭和十九年六月三十日、入隊してからちょうど七カ月が経っていました。シンガポールに十日間

駐留してから列車（有蓋貨車）輸送でマレー半島を北上してタイ国に入り、開通してまだ間もない泰緬鉄道を通りました。（昭和十八年十月に完成）。

この鉄道はビルマの日本軍の補給線として急いで作った線路のため多くの犠牲者を出した悪名高い鉄道です。当時の私は何も知らず、ただ部隊に到着するごとしか頭にありませんでしたが、断崖絶壁にかかる橋が全部木造だったのには驚きました。

それから機関車が石炭を焚いて走るのではなく薪を焚いていました。夜、火の粉がきれいに見えました。

薪が無くなると駅で補給して走ります。私達兵隊の飯や水は途中で兵站があつて補給してくれました。

工事には敵の捕虜を使ったようですが、眼には入りませんでした。よくこんな所に作ったものだとは思いました。戦後間もなく廃線になったそうで、本当に無駄な鉄道を多くの人間を殺して作ったものだと思います。

ビルマ南端のラングーンから鉄道でビルマ中部のマ

ンダレーまで行き、それから先はトラック輸送で目的地ワンチンに八月十七日到着。ここは雲南省に近い要衝です。

菊部隊要員の私達初年兵は、予定を変更してワンチン駐屯の竜部隊である歩兵第一四六連隊の連隊砲中隊に編入させられました。

私達が現地に到着した時、部隊は国境にある四カ所の陣地が敵に包囲されて苦戦中だったので、残留の古兵達も少なく、私達の教育要員が残っているだけでした。

歩兵砲中隊は三個小隊編成が基準ですが、戦闘統行の部隊は補充できないため二個小隊に減り、砲も中隊全部で連隊砲二門と速射砲二門しかありませんでした。

砲兵は歩兵と違って四、五人が一組で、砲身担当、車輪担当、揺架担当、弾薬担当、馬担当などに分れていて、仲間意識が強く、従って上下の階級の区分はあってもビンは全くありませんでした。それに出身地が長崎県内で同県人のよしみで助け合ひ気持ちは強

かったと思えます。古年兵は召集兵が多く六年、七年兵がざらでした。

砲身は重さ一〇〇キロもあり、二人で担ぐのです。馬が通れる所は馬に乗せますが、山に登る時は二人で担ぐのですから大変です。

雲南の山の中に駐屯するので米は困りませんが、副食品特に甘味品は口にしたことはありませんでした。

到着後間もなく、八月二十九日「断作戦」が発動され、北部国境にある日本軍陣地救援作戦が始まりました。竜第五十六師団は、第一四六、一一三、一四八の三連隊で編成、松山祐三中将が師団長です。騰越守備の佐賀歩兵第一四八連隊（蔵重大佐）は昭和十九年六月に敵三万に包囲され、激闘三カ月の末、九月十三日玉砕しました。守兵は千五百人（歩兵一個大隊砲兵二個中隊工兵一個中隊）でした。

拉孟守備の福岡歩兵第一一三連隊（金光少佐）は、昭和十九年五月に敵四万に包囲され、激闘四カ月の末、九月七日玉砕しました、守兵千二百六十人でした。この二つの玉砕は、敵將蔣介石が部下に「日本兵

を見習え」と絶賛したそうです

この八月二十九日発動の「断作戦」は拉孟、騰越玉砕のため中止、平戛守備隊救出に切り替えられました。た。

平戛には私達の連隊の第一大隊が野砲第四中隊と共に守備隊として陣地を構えていました。大隊長は予備役の少佐で郵便局長で召集され、第五十六師団衛生隊長となりビルマに出征、第一大隊長となった安倍少佐です。

昭和十九年五月から敵の攻撃を受け、陣地の争奪戦を繰り返し、食糧が欠乏し、死んだ砲兵隊の軍馬の肉を（砲兵は食はず埋めたもの）歩兵は掘り出して食べたそうです。七月には脚気患者が続出、軍医はヨモギの枯葉でモグサを作り、お灸で脚気を治しました。また、一日交代で水車小屋で榎をつき、玄米を食べさせ脚気を治したそうです。

昭和十九年九月二十一日、第二次救出作戦が成功し今岡連隊長と安倍少佐が握手しました。

駄馬三〇〇頭の衛生救護班が患者二百五十人を收容しました。「断作戦」は連日敵空軍の空襲を受け、夜間行動に終始し、雨季に入ってはますます苦難の連続でした。

昭和二十年二月、ワンチン北方のシュンブー山のジャングルの中に構築した山砲の掩蓋陣地にいた時に、知らぬ間に忍び寄った敵が開口部から手榴弾を投げ込み、それが破裂したため内部にいた戦友六人全部が戦死してしまいました。

「敵が来た！」との歩哨の声に、私は手榴弾を持って外に飛び出て、壕を包囲していた敵に向かって手榴弾を投げ、そこへ救援の小銃隊が来たので助かりましたが、一週間後、顔が痛いので手で擦ったら小さな鉄の破片が取れてきました。

砲は分解して外に搬出して点検したら使用可能と判明したので弔い合戦だと後々使用しました。

昭和二十年三月三日、下士官候補教育のためラン

グリーンに向け十二人の仲間とトラックに乗って分遣となりました。教育中に敵がラングリーンに迫ってきたので戦闘参加のため他の部隊に転属となり、歩兵中隊に配属され、ラングリーン北方ベグー付近の戦闘で連隊砲を持って陣地につく前に英軍の戦車に攻められ、砲を破壊して撤退、武器も小銃少々しかなく後退しました。その後、ベグー付近の戦闘にも参加したりしていました。

断作戦開始一週間位は勝ち戦でしたが、そのあとは撤退作戦で、北から友軍が撤退するのを英軍機が毎日偵察するので昼間は動けず、飯盒炊さんも夜間しかできなく、夜行動する毎日でした。日の丸の友軍機は一度見ただけでした。へたに敵機を射つと、徹底的に砲爆撃の仕返しをされるので我慢して潜んでいるしか仕方ない始末でした。

敵がビルマ南端まで攻めてくるようになったので、下士官教育は実戦でする形になりましたが、終戦間近になって自然と教育隊は解散となり、そして兵長の階級が与えられました。

終戦はシッターンで知りました。

武装解除はタイ国のチェンマイに集結してから行うとの事で、国境越えてチェンマイに到着し、英軍の手で武装解除されました。

その後、南下してバンコク港の近くのナコンナヨークで英軍管理の下で抑留生活に入り、昭和二十一年二月一日に懐かしい原隊に合流、歩兵砲中隊に復帰しました。英軍の給与は案に相違して良好でした。作業は軽作業が主で道路整備と清掃等の楽な作業でした。

昭和二十一年五月十五日、バンコク港で二〇〇〇トンの軍艦に乗りました。五百人位の集団で、部隊本部と通信隊と砲兵が主でした。

五月二十四日、広島の大竹港に上陸、海軍水雷学校で二年半ぶりに故国の空気を胸いっぱい吸い込みました。

五月二十六日午後、大竹出発、翌二十七日懐かしの自宅に帰りました。

二年半全くの音信不通だったので生還は諦めていたそうであげて大喜びでした。

昭和二十二年に結婚し二男二女の親となり、父の跡をついで現在農業に従事して、野菜を主にミカン作りに精を出しております。

## ビルマの戦場で知った

### 戦争の残酷さ

滋賀県 小林 育三郎

私は、大正八（一九一九）年十二月に守山市で生まれました。

県立八幡商業学校卒業、三井物産に入社致しました。昭和十五（一九四〇）年十二月、歩兵第三十七連隊に入営しまして、直ちに中支に派遣され、南京にて初年兵教育を受けました。特別幹部候補生の試験に合格、昭和十七年三月、久留米陸軍予備士官学校入学、六カ月の訓練を経て任官、敦賀歩兵第一一九連隊に転属いたしました。昭和十八年十二月に動員下令、ビルマ戦線で戦い、重機関銃中隊長として苦闘いたしました。